

宇部市における RC 造 2K 型住戸の 1DK への改修による 高齢単身世帯の住まい方の変化

— 公営住宅ストックの高齢世帯向け住戸改善に関する研究 その2 —

CHANGE IN LIFESTYLE OF AGED SINGLE-PERSON HOUSEHOLDS WITH HOUSING UNIT RENOVATION OF TWO ROOMS AND KITCHEN TO ONE ROOM AND DINING KITCHEN IN UBE CITY

— A research on the renovation of existent public housing for aged households Part 2 —

中園 真人*, 大庭 知子**, 佐々木 俊寿***

Mahito NAKAZONO, Tomoko Ooba and Toshihisa SASAKI

The purpose of this research is to reveal what changes have taken place in the life-style of aged single-person households after their dwellings were renovated from 2K to 1DK. The changes indicate that 80% of the dwellers chose to have their meals in the DK room and sleep in the traditional Japanese-style 6 mat tatami room (about 9.96 m²). Due to preferences developed over a long life-time, and due to the DK room's usually being small, many single living elders use tables only without accompanying chairs in the DK in their daily lives. On the other hand, 20% of the single living elders mainly live in the Japanese-style room without using the DK room at all. The research also shows that the single elderly people disposed of part of the furniture possessed by the family when they moved to the renovated house. The single elders who spend their daily lives mainly in one room tend to place a lot furniture in the other room. This is a remarkable feature witnessed in the survey.

Keywords : Public housing, 1970s, Renovation, Two rooms and kitchen, One room and dining kitchen, Life-style

公営住宅, 1970 年代, 住戸改善, 2K型住戸, 1DK型住戸, 住まい方

1. 序論

1970年代前半に建設されたRC造2K型公営住宅ストックは更新時期を迎えており、建て替えのみでなくアセットマネジメントの観点から、個別改善や全面改善事業が取り組まれている。住戸改善の主流は設備更新を主とする1DKタイプへの改修で、高齢者対応の水まわり・台所設備の更新により居室がDKに変更されるため、建設当初からの長期居住世帯も多く高齢化が進行している状況を考慮すると、住戸プランの変更は高齢世帯の住生活に大きな影響を及ぼすものと推察される。

関連する既往研究としては、公営住宅の建て替え事業を対象としたものが多く、建て替えに伴う近隣関係の変化を明らかにしたもの²⁾や、居住者参加型の更新計画の有効性と可能性に関し、建て替え前後の同一居住者の住まい方の変化を考察したもの³⁾、建て替えにおける戻り入居後の住まい方の変化と居住者層を把握し建て替え計画の在りかた方を論じたもの⁴⁾等がある。また、建て替えと住戸改善が実施された2Kタイプ公営住宅を対象に、未改善住戸と改善済み住戸居住世帯へのアンケート調査結果の比較からその効果と課題を把握し、更新事業の方向性を検討したもの⁵⁾がある。

本研究は戻り入居計画で2Kから1DKへ改修された住戸を対象とした高齢世帯の改修前後の住まい方調査をもとに、住戸改善が居

住世帯の住まい方に与える影響を検証することを目的としており、更新事業による高齢者の住環境の変化に着目している点で上記既往研究と共通するが、全住戸が2Kから1DKへ改修された団地の戻り入居世帯の住まい方の変容過程を詳細に分析した報告は見られない。

既報¹⁾では宇部市営住宅を対象に、改修前の2K型住戸における高齢世帯の住まい方の特徴を整理したが、本報では生活行為と居室の対応関係、起居形態、家具保有量、身体状況、習慣の継承志向等を視点に、改修に伴う高齢単身世帯^{註1)}の住まい方の変化の実態とその要因を明らかにし、2K型住戸改善における平面計画に関し考察を加えることを目的とする。

2. 調査概要

2.1 調査の対象と方法

調査対象団地(HS団地)は1969-1970年建設の中層耐火造片廊下型4階建て3棟で構成され、住戸面積34.5 m²の南面2室型2Kタイプ48戸を有す。改修工事は2003-2005年度に毎年1棟実施され、住戸面積の拡大を伴わずに2Kから1DKへ改修された。工事期間中は近隣の家具家電付民間賃貸住宅を市が借上げ、仮住まいとして居住者に提供している。

調査方法は改修前の2K時と同形式で、改修後の住環境に関する

* 山口大学工学部感性デザイン工学科 教授・工博

Prof., Dept. of Perceptual Science and Design Eng., Faculty of Eng., Yamaguchi Univ., Dr. Eng.

** 山口大学大学院理工学研究科 博士後期課程・修士(工学)

Doctoral Course, Graduate School of Science and Eng., Yamaguchi Univ., M. Eng.

*** 宇部市土木建築部 次長

Vice-Chief, Dept. of Civil and Architectural Engineering, Ube Municipal Office

アンケート調査と住戸内のプラン採取及び住まい方の聞き取りを行った。調査期間は2004-2007年の9月と3月である。

改修前の単身世帯の分析対象は21世帯であったが、2世帯転出のため19世帯を改修前後の住まい方比較の分析対象とした。

2.2 改修工事概要

改修工事の概要を図1に示すが、エレベーター1基とスロープが各住棟の共用階段入口部分に新設され、住戸内は水まわり設備の更新を中心に高齢者対応1DKへ改修された。改修前の台所設備は、立った状態でしか調理できず、収納棚も踏み台がなければ手の届かない位置にあったが、改修により車椅子も使用可能な高齢者向けの流し台に替わり、収納棚はスライド式で下斜め方向に引き出せるため、イス座の姿勢で取り出し可能である。浴室は、直置きのため床面から高さのある正方形の浴槽と、冷たく滑りやすいコンクリート床でシャワーも無かったが、改修後は高齢者向けユニットバスの設置により、長方形で下肢の伸ばせる浴槽と滑りにくい床となり、腰掛や手摺・シャワーが付属している。トイレは段差のある和式便器で面積も狭かったが、手摺付き洋式便器を設置し、洗面室と一体化し車椅子が使用可能な広さを確保した。



図1 改修工事概要

以上の水まわり設備の充実に伴い、4.5帖和室と台所の一部をDKに変更し6帖和室と連続する改修プランとなった。その他、緊急用ブザーをDK・浴室・トイレに取付け、室内の段差を解消するとともに玄関に手摺が設置された。

3. 住戸改善前後の住まい方の変化

住戸改善前後の住まい方の比較分析方法として、第一に食事と就寝の関係を食寝分離・一致に分類する。次いで、6帖を主室、4.5帖(改善前)またはDK(改善後)を副室とする。次に、食寝分離の住まい方で、主室で食事と寛ぎを行う場合を「主室生活拠点」、副室の場合を「副室生活拠点」と定義する^{注2)}。一方、食寝一致の住まい方で、主室で食事・寛ぎ及び就寝が完結する場合を「主室完結」、副室の場合を「副室完結」と定義する。尚、改善前は来客の有無により細分類しているが、改善後も来客の有無には変化が無いため省略する。以上の分類を基本とし、これに健康状態・年齢・家具保有量等を分析指標に加え、住まい方の変化パターンの分析を行う。

3.1 改善前後における住まい方の分類

改善前後の居室での行為を指標とした住まい方の変化パターンを図2に示す。更に、事例ごとの住まい方の詳細を表1に示す。改善前は6タイプに分類しており^{注3)}、食寝分離(7例)に対し食寝一致(12例)の方が多く、生活拠点が置かれる居室でみると、主室に生活拠点を置く世帯(10例)と副室に生活拠点を置く世帯(9例)はほぼ同数であった。食寝分離の7例は、来客頻度に差異は認められるが、一室で食事・寛ぎ・接客を行い、もう一方の居室で就寝しており、生活拠点を置く居室の違いにより副室生活拠点と主室生活拠点の2タイプに分類した。食寝一致の12例は、食事・就寝・寛ぎ・接客を同室で行い、来客の有無が生活拠点を置かない居室の使い方に強く影響していた。そこで主室完結と副室完結の2タイプを来客の有無により細分類し、4タイプに分類した。

改善前	改善後	食寝分離				食寝一致		計	
		副室生活拠点	副室生活拠点(季節による生活拠点の変化)		主室生活拠点(副室食事)	主室完結	副室完結		
		食・寛 接	通常 食・寛 接	冬 寛	食	余	食・寛 接		
副室生活拠点	①	3 (S1, 3, 4)	1 (S2)				4		
主室生活拠点	②A	2[1] (S6, 8)			②B	1 (S7)	3		
主室完結	来客有	③A	2 (S9, 12)	1 (S11)		③B	1 (S10)	4	
	来客無	納余			④	3[2] (S20-22)	3		
副室完結	来客有	食・寛 接			⑤A	1(1) (S18)	⑤B	3(2) (S5, 17, 19)	4
	来客無	食・寛 接					⑥	1[1] (S14)	1
計		7	2	4	5	1	19		

凡例()内・布団就寝からベッド就寝へ移行、[]内・改善前からベッド就寝、()内・表1に示す事例番号、■内・住まい方の変化パターン[①:副室生活拠点、②A:主室生活拠点→副室生活拠点、②B:主室生活拠点→主室完結、③A:主室完結(来客有)→副室生活拠点、③B:主室完結(来客無)→主室生活拠点(副室食事)、④:主室完結(来客無)→主室生活拠点(副室食事)、⑤A:副室完結(来客有)→主室生活拠点(副室食事)、⑤B:副室完結(来客無)→主室完結、⑥:副室完結]

図2 改善前後における居室での基本的な生活行為の分類

2Kタイプの小規模住宅では、台所に続く副室で食事をとり、押入れのある主室で就寝する副室生活拠点で二室を利用する住まい方が基本と考えられるが4例と僅かで、狭小な住戸面積にも係らず一室を余室や納戸にした一室完結タイプが多い点が特徴であった。

改善後の住まい方は5タイプに分類され、食寝分離の住まい方が増加し(7→13例)、その結果副室生活拠点が増加し(4→9例)副室完結が減少した(5→1例)。副室生活拠点タイプは、副室で食事・寛ぎ・接客を行い主室で就寝する1DKの基本的住まい方で、7例と最も多い。副室生活拠点(季節による生活拠点の変化)タイプは、通常は副室を生活拠点とし主室で就寝する住まい方であるが、冬期のみ主室に食事の場が移動する。これに対し、主室生活拠点(副室食事)タイプは、年間を通して食事のみ副室でとる主室生活拠点の住まい方で4例と多い。また、主室完結タイプは生活行為の全てが主室で行われる住まい方で、このタイプも5例と多

い点が特徴である。一方、主室完結タイプとは逆に、副室で全生活行為を行う副室完結タイプが1例存在する。

3.2 家具占有率の変化

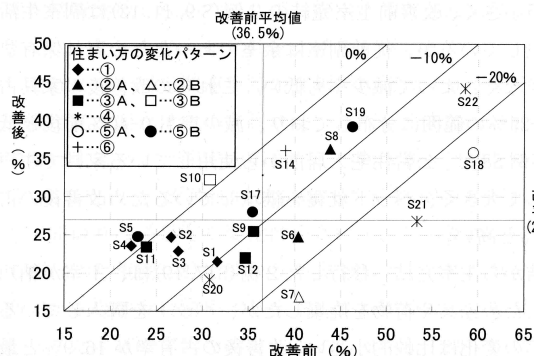


図3 改善前後の家具占有率の変化

表1 改善前後の住まい方一覧

事例番号(注1)	居住年数(注2)	住まい方の分類	改善前										改善後										備考			
			性別年齢	勤務	食事[寛ぎ]形態(注3)	就寝形態(注4)	6⇄4.5建具開閉状況(注5)	冷暖房の種類[主に使用する居室](注6)	夏	冬	A/C使用頻度	食事室	家具占有率(%)	住まい方の分類	住まい方の変化パターン	性別年齢	勤務	食事[寛ぎ]形態(注3)	就寝形態(注4)	6⇄DK建具開閉状況(注5)	冷暖房の種類[主に使用する居室](注6)	夏		冬	A/C使用頻度	食事室
S1	13	副室生活拠点	F62	有	イス[ユカ]	布	取外し	AC[6・4.5-K]扇[4.5]	ス[6・4.5-K]	就寝時以外は使用する	K	31.6	副室生活拠点	①	F65	有	イス	布	取外し	AC[6・DK]扇[DK]	ス[6-DK]	改善前と同様、就寝時以外は使用する	DK	21.5	前・後:ほとんど来ない	改善前はテーブルの代用としていたが、改善後はテーブルを新規購入した。
S2	11		F67	有	ユカ	布	半開閉	AC[6・4.5]	ス[6]カ[4.5]	就寝時以外は使用する	4.5	26.6	副室生活拠点(季節による生活拠点の変化)	①	F72	無	夏:イス冬:ユカ	布	半開閉	AC[6・DK]カ[DK]	カ[6]ス[DK]	改善前と同様、就寝時以外は使用する	DK(6)	24.7	前・後:姉が時々来る	改善後、旧型足踏ミシンを小型電動型に買換えテーブルも新規購入した。
S3	8		F67	無	ユカ	布	取外し	なし(窓開放)	ス[6・4.5]	就寝時以外は使用する	4.5	27.4	副室生活拠点	①	F72	無	ユカ	布	取外し	なし(窓開放)	ス[6・4.5]	就寝時以外は使用する	DK	22.8	前・後:ほとんど来ない	
S4	4	主室生活拠点	F60	有	イス	布	半開閉	扇[4.5]	ス[6]カ[4.5]カ[6]	就寝時以外は使用する	4.5	22.3	副室生活拠点	①	F62	有	イス	布	取外し	扇[DK]	ス[6]カ[6]	改善前と同様、就寝時以外は使用する	DK	23.6	前・後:子供や孫がよく遊びに来る	コタツ機能付テーブルを使用している。
S6	29		F70	無	ユカ	布	閉	扇[6]	ス[6]毛[4.5]	就寝時以外は使用する	6	40.4	副室生活拠点	②A	F73	無	ユカ	布	開	AC[6]	カ[DK]	就寝時のみ使用する	DK	24.8	前・後:娘が時々来る	改善後、ACを購入した。また、来客時とAC使用時は6帖とDK間の襦代わりに取り付けたカーテンを開ける。
S7	18		F70	無	ユカ	B	閉	AC・扇[6]	ス・カ[6]	就寝時以外は使用する	6	40.5	主室完結	②B	F74	無	ユカ	布	半開閉	AC・扇[6]	ス・カ[6]	改善前と同様、就寝時以外は使用する	6	16.9	前・後:友人がよく遊びに来る	ベッドを廃棄処分した。
S8	4	主室完結	F64	無	イス	B	閉	AC[6]	AC[6]ス[4.6]	就寝時以外は使用する	6	43.8	副室生活拠点	②A	F66	無	イス	B	閉	AC[6-DK]	AC[6-DK]ス[DK]	改善前と同様、就寝時以外は使用する	DK	36.2	前・後:友人が時々来る	ソファとテーブルは入居前から使用していたため居室面積に占めて大きめである。改善後は副室生活拠点へ移行したため、AC使用時には襦を半開にして二室同時に空調するようにした。
S9	6		F54	有	ユカ	布	半開閉	AC・扇[6]	AC・ス[6]カ[6]	就寝時以外は使用する	6	35.5	副室生活拠点	③A	F58	有	イス	布	半開閉	AC[6-DK]扇[DK]	コ・カ[6]ス[DK]	夏は改善前と同様就寝時以外は使用する	DK	25.5	前・後:友人が時々来る	改善前は接客時のみテーブルを使用し、改善後は6帖とDK間の襦代わりと座卓を新規購入した。
S10	7		F64	有	ユカ	布	半開閉	AC[6]	コ・ス[6]	24時間使用する	6	30.8	主室完結	③B	F66	有	ユカ	布	半開閉	AC[6]扇[DK]	コ・ス[6]	改善前と同様、24時間使用する	6	32.2	前・後:兄がよく訪ねて来る	
S11	14	主室完結	F72	有	ユカ[イス]	布	取外し	AC[6・4.5]扇[6]	コ[6]ス[6]カ[4.5]	就寝時以外は使用する	6	23.9	副室生活拠点(季節による生活拠点の変化)	③A	F77	無	夏:イス冬:ユカ	布	取外し	AC[6-DK]扇[6]	カ[6]ス[6-DK]	改善前と同様、就寝時以外は使用する	DK(6)	23.4	前・後:友人が時々来る	改善後は、ソファを廃棄処分し、テーブルを新規購入した。
S12	34		F58	有	ユカ[イス]	布	閉	AC・扇[6]	AC・ス[6]	窓を開放することもあるが昼間は使用することが多い	6	34.6	副室生活拠点	③A	F60	有	ユカ	布	開	AC・扇[6-DK]カ[DK]	ス[6-DK]カ[DK]	改善前より窓を開放する機会が増えたが昼間使用する	DK	22.0	前・後:孫が時々訪ねて来る	改善後は副室生活拠点へ移行したため、夏のAC使用時は二室同時に空調し、冬はストープとホットカーペットをDKで使用するようになった。
S20	17		F72	無	ユカ	B	半開閉	AC[4.5]	AC[6]カ[4.5]	夏は24時間使用する、冬はあまり使用しない	6	30.8	主室生活拠点(副室食事)	④	F74	無	ユカ	布	半開閉	AC[6-DK]カ[DK]	AC[6]コ[DK]	改善前と同様、夏は24時間使用し、冬はあまり使用しない	DK	19.1	前・後:ほとんど来ない	改善前、4.5帖にACを設置していたため改修時に取り外さなくてはならぬ、6帖に付替えた。改善後ベッドを廃棄処分した。
S21	25	来客無	F72	無	ユカ	B	閉	扇[6]	ス[6]	就寝時以外は使用する	6	53.3	主室生活拠点(副室食事)	④	F76	無	ユカ[ベッド]	B	閉	扇[6-DK]	ス[6-DK]	改善前と同様、就寝時以外は使用する	DK	26.8	前・後:ほとんど来ない	改善後は副室食事に化したため、扇風機とストープをDKでも使用するようになった。
S22	28		F72	無	ベッド	B	閉	扇[6]	コ・ス[6]	就寝時以外は使用する	6	58.6	主室生活拠点(副室食事)	④	F76	無	イス[ベッド]	B	半開閉	扇[6]	コ[6]ス[DK]	改善前と同様、就寝時以外は使用する	DK	44.2	前・後:ほとんど来ない	改善後は収納ワゴンテーブルの代用とし、副室食事に化したため冬はDKでストープを使用するようになった。
S5	10	副室完結	F88	有	ユカ	布	取外し	AC・扇[4.5]	コ・ス[4.5]	就寝時以外は使用する	4.5	23.0	主室完結	⑤B	F72	有	ユカ	布	半開閉	AC・扇[6]	コ・ス[6]	改善前と同様、就寝時以外は使用する	6	24.8	前・後:ほとんど来ない	改善前、4.5帖にACを設置していたため改修時に取り外さなくてはならぬ、6帖に付替えた。家具や荷物の保有量が少なかったため、改修工事に廃棄処分していない。
S17	24		F80	無	イス(座卓に低い椅子)	布	半開閉	床置型AC[4.5]	床置型AC[4.5]	夏は就寝時以外に使用し、冬は就寝時も使用する	4.5	35.4	主室完結	⑤B	F82	無	イス(座卓に低い椅子)	B	半開閉	床置型AC[6]	床置型AC[6]	改善前と同様、夏は就寝時以外に使用し、冬は就寝時も使用する	6	28.0	前・後:ほとんど来ない	毎日宅配の弁当を注文していた。改善後はベッドを新規購入し、扇風機とストープを6帖で使用するようにした。
S18	16		F74	無	ユカ	布	閉	扇[4.5]	ス[4.5]	就寝時以外は使用する	4.5	59.4	主室生活拠点(副室食事)	⑤A	F76	無	イス(座卓に椅子)	B	閉	扇[6]	ス[6-DK]	改善前と同様、就寝時以外は使用する	DK	35.8	前・後:ほとんど来ない	改善前は布団を常時折畳んで置いていた。改善後はベッドを新規購入し、扇風機とストープを6帖で使用するようにした。
S19	30	来客有	F79	無	ユカ	布	取外し	AC[6・4.5]扇[4.5]	コ・ス[4.5]	就寝時のみ使用する	4.5	46.3	主室完結	⑤B	F81	無	ユカ	B	半開閉	AC・扇[6]	ス・毛[6]	改善前と同様、就寝時のみ使用する	6	39.2	前・後:ほとんど来ない	改善前は布団を常時折畳んで置いていた。改善後はベッドを新規購入し、電気毛布とストープを6帖で使用するようになった。
S14	55		F76	無	ベッド	B	半開閉	AC[6・4.5]扇[4.5]	カ[6]ス[毛][4.5]	昼間の気温が高い時間帯のみ使用する	4.5	39.0	副室完結	⑥	F80	無	ベッド	B	取外し	AC[6-DK]扇[DK]	ス[6-DK]毛[DK]	改善前と同様、昼間の気温が高い時間帯のみ使用する	DK	36.0	前・後:月に数回訪ねて来る	改善前は料理を乗せたトレーを椅子の上に置き食事をとっていたが、改善後はキャスター付ワゴンを使用する。

注1)S13は改善後親子二人暮らしになったため、また、S15、16は転居したため分析から除外した。注2)居住年数は、住戸改善後の調査時点での年数。注3)[]内は食事と寛ぎの起居形態が異なる時のみ寛ぎ形態を表記。注4)[B]はベッドの略、注5)[A/C]はエアコンの略、[C]はカーテンの略で、備付けの襦と取替えている。注6)[K]は改善前の台所、[AC]はエアコン、[扇]は扇風機、[コ]はコタツ、[カ]はホットカーペット、[ス]はストープ、[毛]は電気毛布の略、注7)()内は冬期に食事室が移行する世帯の冬期の食事室を示す

家具占有率の変化を図3に示すが、全体平均では家具占有面積率は36.5%から26.9%に減少しており、既存家具の廃棄処分が行われている。改善前後共に副室生活拠点の4例(S1-4)は家具保有量の変化が小さく、改善前主室完結の3例(S9, 11, 12)は副室生活拠点へ変化しているが、従前副室は余室であったため家具保有量が比較的少なく、よって減少率も低い。これらの改善後の家具占有率は20-25%の範囲に分布しており、減少率も0-10%前後と低い。一方事例S8は、公営住宅入居前から使用している家具で住戸面積に対して大きく、ベッド就寝を継承しているため改善後の占有率も36%と高い。

副室完結から主室完結へ移行した2例(S17, 19)は、主室が納戸化していたため家具や荷物を廃棄したが、ベッドを購入しているため占有率の変化は比較的小さい。改善後の占有率が16.9%と最も低いS7は、主室完結に移行するためベッドやタンス等の大型家具を廃棄し、副室には殆ど家具を置いていない。一方、S5は家具や荷物は殆ど廃棄しておらず、占有率の変化は小さい。

改善前主室完結の3例(S20, 21, 22)と副室完結の1例(S18)は、納戸化していた居室の家具や荷物を大量に廃棄処分したため減少率が10%以上と高いが、うち2例(S18, 22)は主室でベッド就寝するため、副室に家具や荷物が大量に置かれ、改善後も占有率が35%以上と高い。また改善前後で生活行為の場に変化のない2例(S10, 14)は占有率の変化が小さく、生活拠点を置かれていない居室が余室或いは接客室であったため、家具占有率が低かったことが影響している。

3.3 起居形態の変化

表2に起居形態の変化を示すが、食事の起居形態は4例(S2, 9, 11, 18)がユカ座からイス座へ移行し、改善後は副室で食事をとっている。3例(S2, 9, 11)はテーブルを新規購入しているのに対し、1例(S18)は下肢関節疾患のためユカ座が出来なくなり、座卓と椅子を使用している。これに対し5例(S3, 6, 12, 20, 21)はDKで座卓を使用するユカ座の世帯である。副室で食事をする世帯の増加に係らず、食事・寛ぎ時のユカ座の世帯が殆ど減少していない理由として、「DKにテーブルを置くスペースがない」という物理的条件や「テーブルを新規購入したくない」という経済的条件、「畳に座るのに慣れている」という習慣に由来するものが挙げられた。

寛ぎは4例(S1, 2, 9, 18)がユカ座からイス座へ移行している。S1は改善前棚をテーブルの代用とし寛ぎ時はユカ座であったが、改善後は副室がフローリングに改修されたことと、イス座志向より

テーブルを新規購入している。S18は下肢関節の疾患のためベッドを新規購入し、ベッド端座位での寛ぎに移行している。逆に、1例(S12)がイス座からユカ座へ移行している^{註4)}。

就寝形態は3例(S17-19)が加齢による身体機能の低下が原因で、家具や荷物を廃棄しベッドを購入している。逆に、2例(S7, 20)はベッドを廃棄して布団就寝へ移行している^{註5)}。改善前に布団就寝であった居住者の多くは、加齢による足腰の衰弱を考慮し将来的にベッド就寝を希望していたが、「ベッドを置く」と狭くなる「和室である」といった物理的条件や、「慣れていない」という習慣に由来する要因によりベッドを置いていなかった。改善後も同様の理由により、身体機能が低下した高齢世帯以外のベッド就寝は増加していない。このように全体としては住戸改善が就寝形態に大きく影響していないものの、5例において変化が認められ、就寝形態を変化させる動機となっている。

3.4 住まい方の変化パターン

次に住まい方の変化に視点を置き、図2に示す改善前の住まい方のタイプ毎に変化の特徴を整理する。

「副室生活拠点：S1-4」は、改善前には台所に隣接する4.5帖和室を生活拠点、主室を寝室とし、食事・寛ぎと就寝を分離する住まい方であったが、食事の場である副室がDKに変化したため、そのまま従前の住まい方が継承され^{註6)}、最もスムーズに順応できたタイプとして位置づけられる。

「主室生活拠点→副室生活拠点：S6, 8」は、改善前には6帖の主室を生活拠点、副室を寝室とし、食事・寛ぎと就寝を分離する住まい方であったが、DKへの改修により必然的に和室の主室に就寝の場が移動し、これに伴い食寝分離のため6帖和室での食事・寛ぎ・接客が板張りのDKに移動しており、大きく住まい方が変化したタイプである。これに対し「主室生活拠点→主室完結：S7」は、改善前は主室を生活拠点、副室を寝室とする食寝分離の住まい方であったが、副室のDKへの改修により主室に就寝の場が移動したのみで、DKは調理のみ行う余室で、6帖和室での食事・寛ぎ・接客の様式は変化しておらず、ユカ座の起居様式志向の影響が認められる。

「主室完結(来客有)→副室生活拠点：S9, 11, 12」は、主室完結から副室生活拠点への移行世帯であり、食寝分離に移行したため就寝時に座卓を片付けて布団を敷く準備始末行為が解消されている。また、S9とS11は、改善前からイス座の習慣があったため、スムーズにイス座の起居形態へ移行できたと考えられる。これに対し「主室完結(来客有)：S10」は、余室となっていた副室がDKに改修されたものの、改善前後で住まい方に変化はなく、「主室生活拠点→主室完結」同様ユカ座の起居様式の影響が認められる。

これに対し「主室完結(来客無)→主室生活拠点(副室食事)：S20-22」は、改善前は副室が納戸・余室で、主室で生活が完結していたが、食事のみ副室に移行し、加齢による体力の衰えがキッチンに近い場所への食事の場の移行要因として考えられる^{註7)}。

「副室完結(来客無)→主室完結：S5^{註8)}, 17, 19」は、主室に副室での生活行為が全て移動しており、新たに設けられたDKは調理のみ行う余室となっている。これは畳上の座卓で食事をする起居形態の継承が要因として指摘される。また改善前に副室完結(来客無)であった1例(S18)は、食事の場である4.5帖和室がDKに

表2 起居形態の変化

行為 世帯主 起居室 形態	食事				寛ぎ				就寝					
	50-64	65-74	75-84	計	50-64	65-74	75-84	計	世帯主 起居室 形態	50-64	65-74	75-84	計	
改善前	ユカ	2	10	1	13	2	9	1	12	布団	4	7	2	13
	イス	2	2	2	6	2	3	2	7	ベッド	0	5	1	6
	計	4	12	3	19	4	12	3	19	計	4	12	3	19
改善後	ユカ	1	6	2	9	1	6	2	9	布団	3	8	1	12
	イス	2	3	5	10	2	3	5	10	ベッド	0	1	6	7
	計	3	9	7	19	3	9	7	19	計	3	9	7	19

凡例 ()内・座卓に椅子を使用、[]内・ベッドに座る。季節によって起居形態が異なる世帯は通常の起居形態を示す。世帯主年齢は改善前後で異なるため世帯主年齢別の起居形態数値が改善前後で一致しない

変化したため、キッチンに近い食事の場はそのまま移動せず、寛ぎと就寝(ベッド就寝に移行)が主室に移動したものと考えられ、結果的に「主室完結(来客無)→主室生活拠点(副室食事)」タイプと類似した住まい方がなされている。

「副室完結(来客有): S14」は、改善後も副室で生活が完結し、DK内に置かれたベッド端部を常座^{注9)}とする起居形態を継承し、主室が接客室として確保されている。

このように、住まい方が変化した事例では和室4.5帖副室のDKへの改修を契機として、起居形態や生活行為と居室の対応関係の継承、加齢による身体機能低下等が作用し、改善前とは異なる住まい方へ移行している。また全体の傾向として、大型家具等を廃棄処分し狭い居住空間を有効利用する住まい方への移行がある一方、主室完結タイプではDKの余室化が特徴として指摘される。

3.5 住戸改善の評価

住戸改善前後に実施した住環境評価調査結果を図4に示す。改善前の要望度は11項目から居住者が改善を望む3項目を選択する形式で百分率を示す。満足度は11項目に対する評価を「満足5、やや満足4、普通3、やや不満2、不満1」に点数化した平均値を示す^{注10)}。

改善要望は水まわり関連が上位7項目を占め、8位以降が居室関連である。満足度も水まわり関連の評価が中間値の3.0を全て下回り、対照的に居室関連の評価は全て3.0を上回る。これより水まわりの改善を求めると同時に居室の間取りは現状維持を希望する居住者の多さが窺える。

改善後はトイレに対する評価が最も高く、評価値も設備が2.47、広さは1.92上昇している。また高齢者向けユニットバスを導入した浴室の改善前後の満足度も、設備が1.67、広さが1.5上昇しており、水まわり関連の評価は全て3.5を上回り改善効果が顕著で

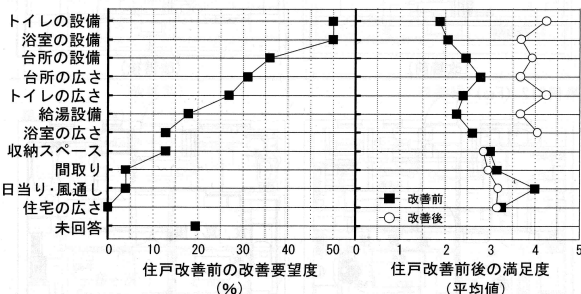
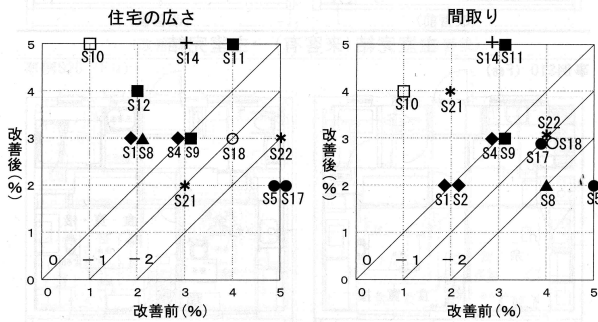


図4 住戸改善前後のアンケート結果



凡例 図中の記号は、図3(改善前後の家具占有率の変化)の住まい方の変化パターンと同記号を使用

図5 住戸改善前後の住まい方移行タイプ別満足度の変化

ある。一方日当り・風通しに対する評価は全体で0.76低下しており、副室の押入れが玄関と主室を結ぶ廊下を塞ぐ位置に移動したことが原因と考えられる。「夏の昼間は玄関ドアとバルコニー側窓を常時開放し涼んでいたが、押入れの位置変更により風通しが悪くなった」というヒアリング結果も得られた。

これに対し居室関連項目の評価平均値は3.0前後で、改修前後で満足度に変化は認められない。ただし住まい方の変化パターンに着目すると、「住宅の広さ」と「間取り」に関し差が認められる(図5^{注11)})。改善前後共に副室生活拠点の3例(S1, 2, 4)は広さ・間取りの満足度の変化は小さいが、生活拠点が主室から副室に移行した事例(S8)で間取りの評価が低下しており、生活拠点の副室が就寝のみに使用する主室よりも狭くなった結果と考えられる。また家具や荷物を廃棄したにも関わらず副室が余室化している事例(S5, 17)や、主室での食事スペースが狭くなり、副室に食事の座を移した事例(S18, 22)でも広さ・間取りともに評価が低下している。一方改善前後で生活行為の場に変化のない事例(S10, 14)では広さ・間取りに対する満足度が上昇しており、改善前と比べるとキッチンと食事の座が近くなったことが要因と考えられる。

4. 住まい方の分析

前章では住まい方の変化の全体像を示したが、本章では事例の平面図をもとに、生活時間・健康状態・年齢・建具開閉状況・家具保有量・来客を指標に加え分析を行う。

4.1 「副室生活拠点」

副室で食事・寛ぎ・接客を行い、主室で就寝するスタイルを継承している世帯である(図6)。S3は主室と副室間の襖を取外し開放的な空間としつつも、副室で食事・寛ぎを行い主室で就寝する住まい方を改善後も継承しており、S1とS4も同様である^{注12)}。しかし、ユカ座志向のため座卓を使用しており、フローリング上でのユカ座に対する不満を感じている。S2は改善前副室に座卓とテレビを置き生活拠点としていたが、改善後は、冬期以外はミシン

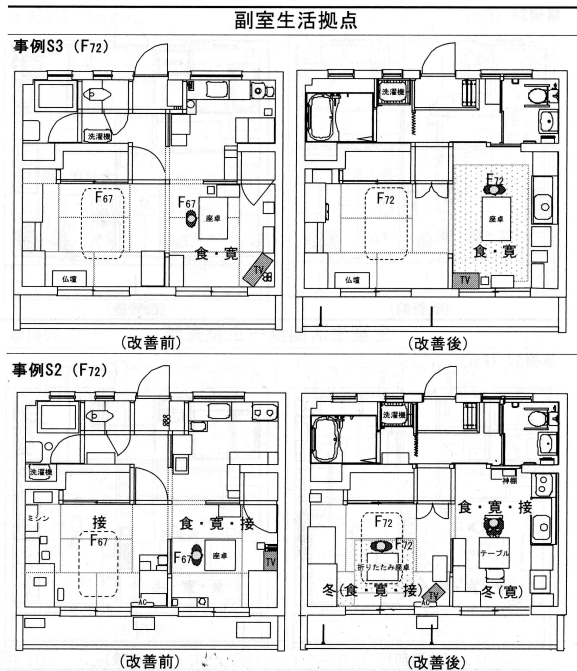


図6 「副室生活拠点」の事例

台に代用するため新たに購入したDKのテーブル^{注13)}に常座を置き、テレビは副室に配置スペースを確保できずに主室へ移動しており、冬期は主室のホットカーペット上の座卓に常座が移動する。また、テレビ視聴時間は比較的短くミシン使用時間が長いので副室に居る時間が長く、冬期はミシン使用時のみ副室を使用する。

このように改善前に副室生活拠点であった世帯は、改善前の生活スタイルを改善後も継承し1DK改修に順応出来ているが、ユカ座志向の世帯においては課題が残る。

4.2 「主室生活拠点→副室生活拠点・主室完結」

S6とS8は改善前玄関に直結する主室で食事・接客・寛ぎを行い、副室を寝室として独立させるため主室と副室間の襖を常時閉めていた(図7)。改善後は副室で食事・寛ぎ・接客を行い、主室で就寝する公私分離の住まい方を継承しているものの、S6は副室にテレビ配置スペースを確保できず敷居上に配置し、下肢関節疾患のため主室に布団を敷いたままのため、襖をカーテンに付替え接客時は主室の布団が見えないようカーテンを閉めている。S8は、生活拠点室が就寝室より狭くなったため、テーブル、ソファとテレビの配置スペースが狭くなり、間取りに不満を感じている。

S7は、改善前副室でベッド就寝していたが、改善後はベッドを廃棄し主室での布団就寝に移行し、副室は調理以外使用していない。来客が頻繁かつ多人数で副室で接客するには狭い点や、座卓

が大きく副室に置くスペースが無いことも主室生活拠点へ移行した要因で、ベッド就寝の継続よりも畳上でのユカ座の食事・寛ぎや接客スペース確保が優先されている。

以上より、6帖の主室を生活拠点とし副室を寝室としていた世帯では、スペース不足からDKへそのまま生活拠点を移すのは難しい状況が読み取れる。

4.3 「主室完結(来客有)→副室生活拠点・主室完結」

改善前は主室で生活が完結し、副室は普段使わない家具等を置き来客の宿泊時のみ使用していたが、習慣や加齢によるイス座志向、布団の準備始末行為の解消、副室から移動した家具によるスペース不足、来客への対応等から副室生活拠点へと移行している(図8)。また、全世帯子供や孫、友人等の来客が有り、1例(S11)を除いた3例(S9, 12, 10)は有職者なので在宅時間が短く年齢層は

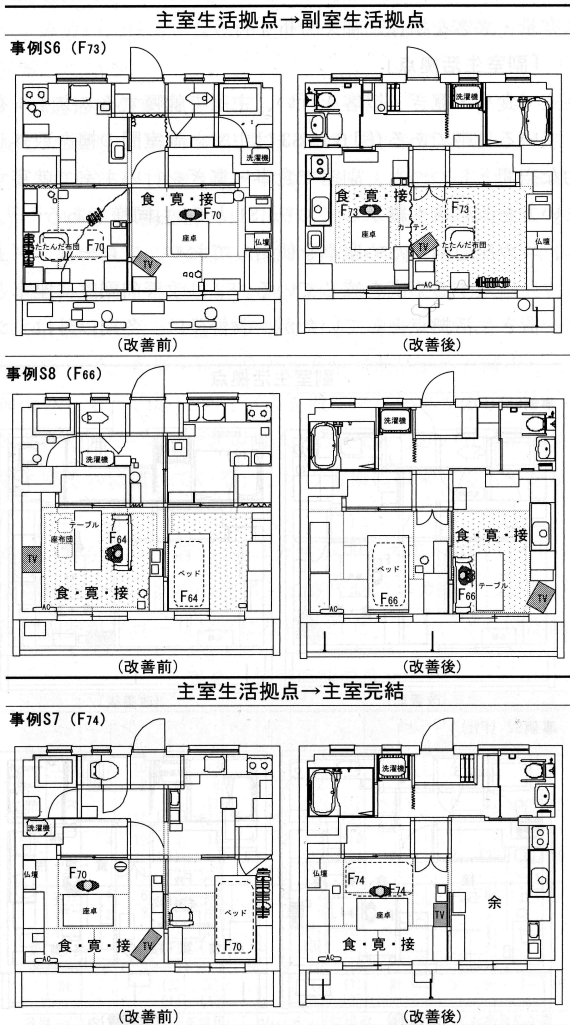


図7 「主室生活拠点→副室生活拠点・主室完結」の事例

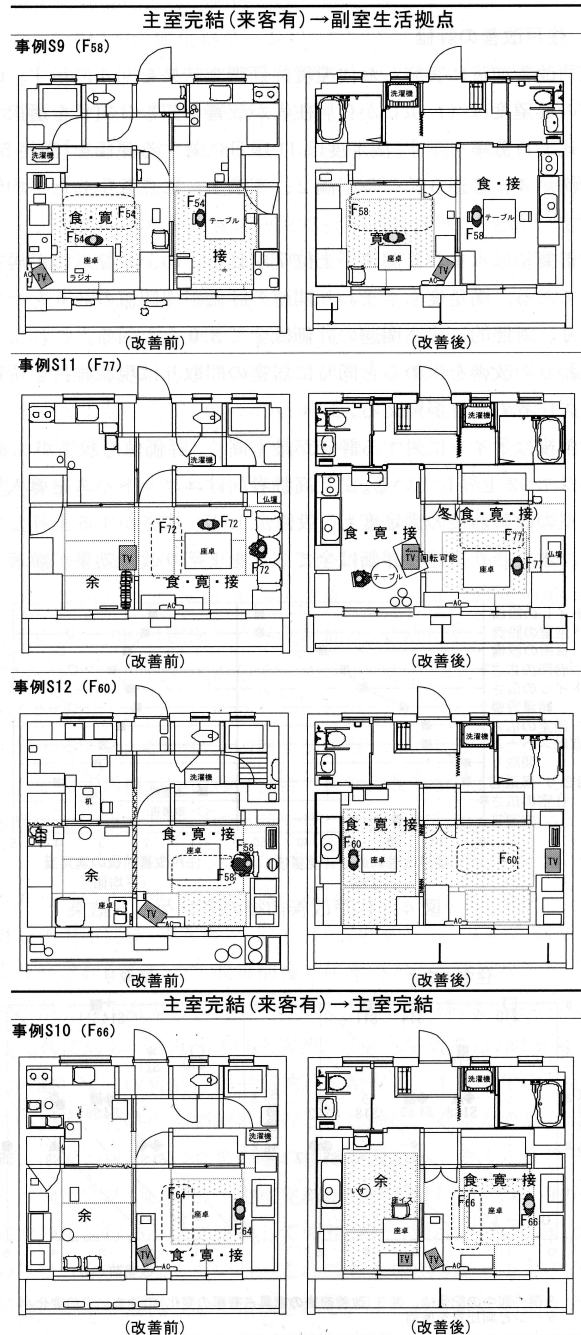


図8 「主室完結(来客有)→副室生活拠点・主室完結」の事例

58 - 66 歳と比較的若い。

S9 は改善後小さめのテーブルと座卓に買換え^{注14)}、DK のテーブルに常座を移している。改善前から副室での接客用にテーブルを使用していた習慣により、生活拠点の移動とイス座の起居形態へスムーズに移行出来たものと考えられる。また、タンス等大型家具が主室へ移動したことによりスペースが狭くなったことも、生活拠点が副室へ移行した要因の一つと考えられる。S11 は襖を取外し二室を一体的に使用する住まい方を継承している。改善前は主室に置かれた座卓を中心に、ユカ座で食事ソファで寛ぐ起居形態であったが、77 歳と高齢のため改善後 DK 用にテーブルを購入しイス座の起居形態へ移行している。ただし冬期はコタツを使用するため主室を生活拠点とする生活様式で、季節により常座が移動するためテレビは両居室から視聴可能な回転仕様である。S12 は、改善前副室は時々来訪する親戚の宿泊室とし、タンス等の大型家具を置いてアコーディオンカーテンは常時閉めていた。改善後は来客の宿泊スペースを確保するため DK で食事・寛ぎを行い、スペースの狭さから主室にテレビを置くためアコーディオンカーテンは常時開放している。改善前は就寝時に座卓を移動して布団を敷いていたが、改善後は主室に座卓が無いため布団準備始末行為が解消されている。また、来客宿泊時は副室が寝室に転用されるため、簡単に移動可能な折りたたみ式座卓を購入しており、宿泊スペース確保が重視されている。

S10 は改善前主室で生活の全てが完結し、副室を使用頻度の低い家具等を置く余室としていた。改善後は副室に絨毯を敷き座卓とテレビを置くが殆ど使用しておらず、調理スペースが広がったため間取りには満足している。

このように、改善前主室完結であった世帯では、前節の「主室生活拠点→副室生活拠点・主室完結」の場合と異なり就寝の場の移動がなく、余室としていた副室に食事・寛ぎ・接客が移動しており (S9, 11, 12)、改善後の住宅の広さの評価も高いことから (S11, 12)、1DK の住戸プランに順応出来ている事例といえる。

4.4 「主室完結 (来客無) → 主室生活拠点 (副室食事)」

年齢層が 74-76 と高齢世帯であり、改善前は加齢による体力の衰えにより外出時間が短く一日中住戸内で過ごし、主室の常座周辺で生活が完結するように日用雑貨を配置していた。改善後は、食事の場のみ副室に置き、常座は主室に置く主室生活拠点の住まい方となっている (図 9)。

S22 は、膝の屈伸が困難なため主室のベッド端部が常座であった。改善後は副室の家具や荷物を大量に廃棄し、通常は副室で棚をテーブルに代用しイス座の食事をするようになった。しかし、冬期は主室にコタツを設けるためベッド端座で食事をとることが多い。同様に S21 も大量の家具や荷物を廃棄したものの、改善後

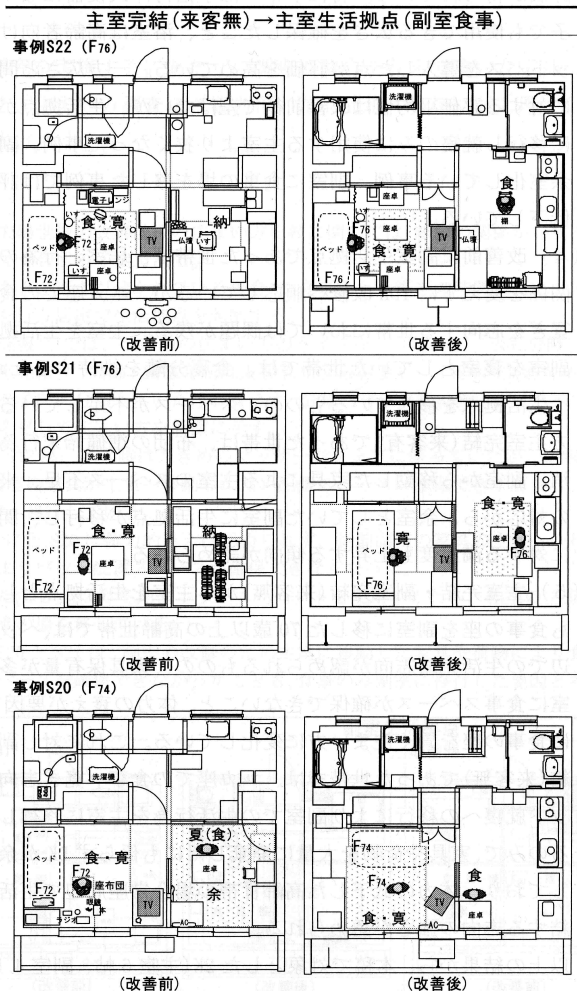


図 9 「主室完結 (来客無) → 主室生活拠点 (副室食事)」の事例

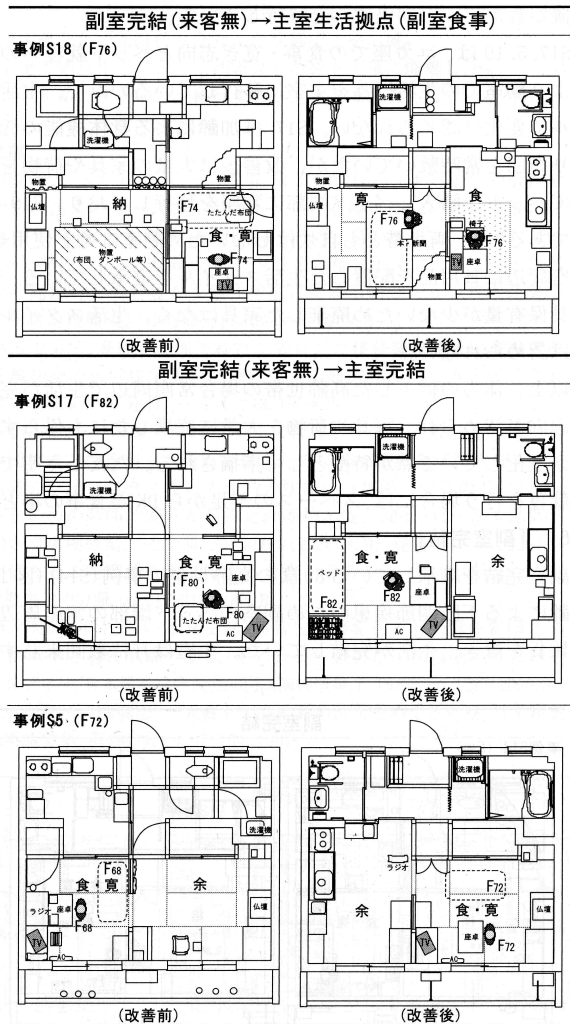


図 10 「副室完結 (来客無) → 主室生活拠点 (副室食事)・主室完結」の事例

ベッド配置スペースを主室中央にしか確保できず、ベッド脇に座卓を置けなくなったため、副室に絨毯を敷き座卓で食事するようになった。そのため食事の際テレビを視聴できず不満を感じている。S20 は最上階西端住戸に居住し、改善前は主室にベッドとテレビを置きベッド脇に座布団を敷き常座とする^{註15)}主室完結の住まい方であるが、夏期は西側壁面の放射熱により主室の室温が上昇するため、夏期のみ副室の座卓で食事をしてきた。改善後は副室の家具を主室に移動したためベッドを廃棄し布団就寝に移行し、食事は主に副室でとる。

以上より、ベッド周辺での一室完結志向が認められるものの、家具保有量が多く主室に食事スペースが確保できないことと、体力の衰えが要因でDKに食事の座を置く住まい方に変化しているのが特徴である。

4.5 「副室完結(来客無)→主室生活拠点(副室食事)・主室完結」

「主室完結(来客無)→主室生活拠点(副室食事)」と同様に、1例(S5)を除き、加齢による身体機能低下により住戸内に閉じこもりがちな世帯であり、4例(S18, 17, 5, 19)とも70歳以上の高齢世帯で、改善前は常座周辺に日用雑貨を置き生活を完結させていた(図10)。

S18 は、改善前副室完結であったが、下肢関節疾患のためユカ座が困難となりベッドを購入し、食事以外の生活行為は主室中央に置かれたベッド端座位へと移行している。

S17, 5, 19 は、ユカ座での食事・寛ぎ志向とベッド就寝への移行により副室での生活行為を主室に移行しているのみで、生活スタイルに変化は認められない。S17 は加齢による身体機能の低下により布団を常時敷いていたが、改善後は大量の家具や荷物を廃棄してベッドを購入しベッド端部に常座を移行しており、S19 も同様である^{註16)}。両世帯とも自炊はしないため副室は殆ど使用せず、常座周辺に日用品を配置した生活スタイルを継承している。S5 は家具保有量が少ないため廃棄した家具はなく、生活スタイルに変化は認められない。

以上、体力の低下した高齢世帯の場合常座周辺で生活が完結する志向が認められ、家具や荷物を大量に廃棄したにも係らず、DKが余室化している点の特徴として指摘される。ただし主室でベッド就寝を行う場合には、スペースの不足からDKが食事の場となる。

4.6 「副室完結」

副室完結を継承している80歳の高齢世帯の事例(S14)(図11)で、加齢による下肢関節疾患のため副室のベッド端部の常座周辺に日用雑貨を置き、生活が完結していた。主室は月に数回来訪する親

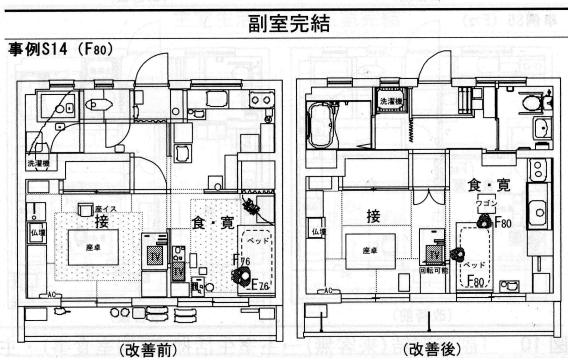


図11 「副室完結」の事例

戚のため接客を意識した設えであった。改善後も居室と行為の対応関係に変化は認められず、副室にベッドを置くため主室と副室間の襖を取外して敷居上にテレビを置き、両居室から視聴可能な回転仕様としている。体力の衰えと接客室の確保により、DKが生活拠点のみでなくベッド就寝の場となっている唯一の事例である。

5. 結論

本稿では2Kから1DKへの住戸改善による高齢単身世帯の住まい方の変化とその要因について分析を行った。得られた知見は以下の通りである。

- (1) 改善前は食寝分離(7例)より一室に生活行為が集中する食寝一致(12例)が多いが、改善後は食寝分離が増加し(13例)、一室完結タイプは減少した(6例)。ただし起居形態は改善前と同様ユカ座が多く、DKで座卓を使用するユカ座世帯は5世帯と多い。長年の生活習慣によるユカ座志向の強さを確認できる。
- (2) 家具占有面積率は約10%減少し、既存家具の廃棄処分が行われている。生活行為の場に変化のない事例では家具保有量の変化が小さく減少率は比較的低いが、改善前主室完結・副室完結の事例では、納戸化していた居室の家具や荷物を大量に廃棄したため減少率が高い。ただしベッド就寝の場合には改善後も占有率は高い。
- (3) 住戸改善の主目的である水まわり設備改善に対しては高い評価が得られている。特にトイレは手摺付洋式便器になり車椅子でも使用できる広さを確保したこと、浴室は高齢者向けユニットバスを導入した点が評価を高めている。一方広さと間取りに対する評価平均値は改善前後で差はないが、生活拠点が副室に移行し就寝のみに使用する主室より狭くなった事例、副室が余室化している事例、副室に食事の場を移した事例では評価が低下している。
- (4) 改善前に副室生活拠点であった世帯は、居室と行為の対応関係を変えずに1DK改修へ順応しているが、ユカ座での食事・寛ぎを志向する世帯においては課題が残る。主室を生活拠点、副室を寝室としていた世帯では、食寝分離を維持するためDKへ生活拠点を移しているものの、スペースが不足している。一方主室完結(来客有)であった世帯は、布団の準備始末行為の解消、副室から移動した家具による主室のスペース不足、来客への対応から、余室としていた副室に生活拠点が移行し、間取りに対する満足度も上昇する傾向が認められる。
- (5) 主室完結・副室完結(来客無)から主室を生活拠点としつつも食事の座を副室に移した70歳以上の高齢世帯では、ベッド周辺での生活完結志向が認められるものの、家具保有量が多く主室に食事スペースが確保できないこと、体力の衰えが要因でDKに食事の座を置く住まい方に変化している。これに対し副室完結(来客無)であった世帯では、ユカ座での食事・寛ぎ志向とベッド就寝への移行により副室での生活行為を主室に移行しているのみで、家具や荷物を大量に廃棄したにも係らずDKが余室化しており、体力の低下した高齢世帯の場合常座周辺で生活を完結する志向の強さが認められる。

以上の結果から、本稿で対象とした2K(主室6帖、副室4.5帖)型住戸の単身世帯向け住戸改善のあり方に関し考察を加える。

改善前に副室生活拠点と主室完結(来客有)であった世帯は1DK改修へ順応しており、主室を生活拠点、副室を寝室としていた世帯もDKへ生活拠点を移している。こうしたDKを食事・寛ぎ・接客の場とする単身世帯に対しては、生活拠点を置く居室の広さを確保するため、DKの面積を広く確保した主室とし、ベッドが配置可能な広さの寝室を副室とする改善計画が相応しいと考えられる。また食事・寛ぎ時のユカ座の起居形態への志向が根強いことから、DKの床材は畳あるいは畳と同一寸法の木板パネルを準備し、居住世帯の志向に合せ選択可能とする方法も検討されたい。

主室完結・副室完結(来客無)の高齢世帯は、常座周辺で生活を完結する志向が強く、ベッド就寝が大半であるため、常座とベッド配置スペースを確保可能な広さの主室と台所を組み合わせ、台所と常座間の動線を短縮した家事労働の軽減が可能な1K型の平面計画とし、食事・寛ぎ時のユカ座志向が強い点にも配慮し、DK同様床材は畳と木板パネルを選択可能とすることが望ましい。

以上の考察は地方都市の1団地19事例の調査から得られた結果を基にしており、地域性や住宅事情の相違は考慮されておらず、普遍性の観点からは充分とはいえないが、1DKへの改善が大半を占める2K型住戸改善に関する一提案としての意義を有すものと考えられる。今後は、居住者のライフスタイルや住意識に配慮した柔軟な改善計画の在り方の検討が課題である。

謝辞

本研究を実施するにあたり、調査の機会を与えて頂いた宇部市住宅課と、住まい方調査にご協力頂いたHS団地の皆様に対し厚くお礼申し上げます。

注

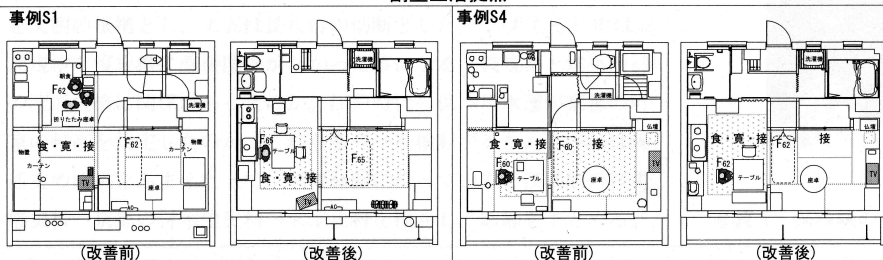
- 注1) 夫婦世帯の改善前後の住まい方比較に関しては、紙幅の関係から稿を改めて報告する予定である。
- 注2) 食事と寛ぎが分かれている場合は、食事よりも寛ぎの時間が長いので、寛ぎを行う居室で生活拠点を判断する。
- 注3) 既報¹⁾では、改善前の住まい方のタイプを、「基本」「公私分離」「主室完結」「高齢・副室完結は来客有り」と来客無し」「高齢・主室完結」の6タイプに分類していた。本稿では、分類内容に変更は無いが、タイプ名を変更して住まい方を簡潔に示す。
- 注4) S12は、寛ぎ時は大きめのマッサージチェアに座っていたが、改善後は副室の家具が主室へ移動したため配置スペースが確保できず廃棄し、ユカ座へ移行している。
- 注5) S7とS20に体力的衰えは認められず、従前副室の家具の主室への移動によりベッド配置スペースが確保できなくなった。
- 注6) ただし、S2は冬期にホットカーペットを使用するため、和室の主室へ食事の場を移している。
- 注7) S20とS21は、副室の改修のため主室に移動した家具や荷物により食事スペースを確保できなかったことも、食事のみ副室に移行した要因と考

- えられる。
- 注8) S5は、既報¹⁾の改善前の住まい方の分類では副室生活拠点である「基本」に分類していたが、実際の住まい方は他の世帯と異なり副室完結であったため、本論では居室の使い方のみの分類なので副室完結(来客無)に加え分析を行っている。また改修後は「主室完結」に分類する。
- 注9) 高橋らは個人が住居内で居る決まった場所を「座」とし、中でも食事や寛ぎ、接客を行うなど日常において滞在時間が長い座を「常座」と定義した⁶⁾。
- 注10) 満足度の場合未回答のある項目は未回答数を減じた回答数の平均値とする。一方改善要望度は3項目を選択する方式で、2項目または1項目のみの回答の場合は空欄を未回答として評価に含める。
- 注11) 未回答の世帯と改善前後でいずれか未回答の世帯は除外するため、広さ・間取りの2項目とも13世帯の満足度の変化を示す。
- 注12) S1は、改善前は台所・副室・主室間の襖を取外し、食事時は台所の棚をテーブルの代用としたイス座の起居形態で、テレビ視聴時は台所の椅子に座るか台所で折りたたみ座卓を使用していた。また、接客時は副室で折りたたみ座卓を使用していた。改善後は、主室と副室間の襖を取外し、テーブルを購入して食事・寛ぎ・接客を行う。S4は、改善前は主室での接客が頻繁なためテレビを主室に置き、副室から視聴していた。改善後は副室と主室間の襖を取外し、改善前の住まい方を継承する(付図1)。
- 注13) 裁縫が趣味で、所持していたミシンが旧型で大きく廃棄したため、ミシン台に代用可能なテーブルを購入し副室に置いている。
- 注14) 座卓を買換えた理由は、本団地に転居する前から使用していた家具サイズが住戸面積に対し大きめであったこと、副室に置いていたタンスを主室に移動したため座卓を置くスペースが狭くなったこと、また、布団の準備始末時の座卓を移動する労力の削減が挙げられる。
- 注15) S20は、改善前は主室のベッド脇の座布団に座って読書やテレビ視聴をして寛ぎ、食事はお盆に料理をのせ畳に直に置いてとっていた。
- 注16) S19は、改善前は副室の常座周辺で生活が完結し、布団は準備始末行為が困難なため常時折りたたんだ状態で主室に置いていた。改善後は、従前主室が納戸化していたため家具や荷物を大量に廃棄し、ベッドを購入して主室完結の住まい方へ移行するが、副室は余室化している(付図2)。

参考文献

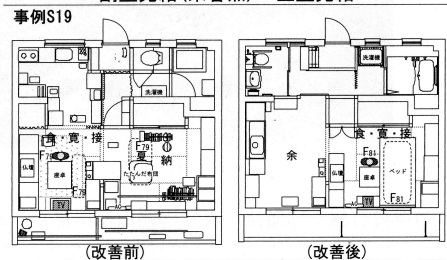
- 1) 中園真人・大庭知子・佐々木俊寿:RC造2K型住戸における住戸改善前の高齢世帯の住まい方—公営住宅ストックの高齢世帯向け住戸改善に関する研究—その1—,日本建築学会計画系論文集,第609号,pp.107-114,2006.11
- 2) 巖平・横山俊祐・海辺真一郎:公営住宅の建て替えにともなう近隣関係の変化—高齢者ための豊かな集住環境に関する研究—(6),日本建築学会大会学術講演梗概集,E-2分冊,pp.327-328,1999.9
- 3) 福田由美子:高齢者の環境移行に着目した建替後の住まい方の考察—居住者参加型の公営住宅更新計画に関する研究(3)—,日本建築学会大会学術講演梗概集,E-2分冊,pp.241-242,1999.9
- 4) 丸茂みゆき・沢田知子他4名:戻り入居層の特徴と生活行為の場の考察—建替団地における戻り入居層と住まい方に関する調査研究その1—,戻り入居者のライフスタイルと入居時の住まい方事例—同その2,戻り入居層と住まい方の時間的変化からみた計画的示唆—同その3,日本建築学会大会学術講演梗概集,E-2分冊,pp.307-312,2003.9,建替後住宅における居住性評価とその時間的変化に関する考察—同その4,日本建築学会大会学術講演梗概集,E-2分冊,pp.217-218,2004.8
- 5) 鈴木秀典・川上光彦・小林史彦:建替・改善を行った公営住宅団地における居住水準と居住意識の変化(その1-2)—金沢市平和町団地におけるケーススタディ—,日本建築学会大会学術講演梗概集,F-1分冊,pp.1217-2000.9
- 6) 古賀紀江・高橋鷹志:一人暮らしの高齢者の常座をめぐる考察,日本建築学会計画系論文集,第494号,pp.97-104,1997.4

副室生活拠点



付図1 「副室生活拠点」の事例

副室完結(来客無)→主室完結



付図2 「副室完結(来客無)→主室完結」の事例

(2008年6月11日原稿受理,2009年2月3日採用決定)